

地域づくり表彰

大湫町 神明大杉再生検討会議（岐阜県瑞浪市）

まちのシンボルの倒伏をきっかけ としたミライへ繋がる地域づくり

大湫町 神明大杉
再生検討会議

大湫町コミュニティ
推進協議会会長

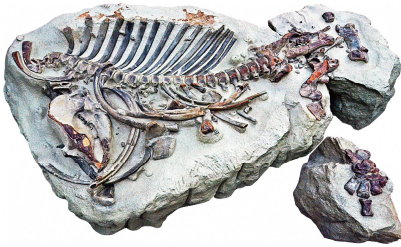
加藤 博一



1. 瑞浪市の概要

瑞浪市は、岐阜県の南東部に位置し、木曾川や土岐川が流れ、市域の70%が山林の自然豊かなまちです。その一方、名古屋までJR中央線で48分とアクセスも良好。

2000万年前から1500万年前のクジラや海獣、ゾウやウマ、貝類や植物の化石が見つかる「化石のまち」として有名です。令和4年6月には、世界で7例目となる謎の奇獣「パレオパラドキシア」の全身骨格が発見され、全国的に話題となりました。



謎の奇獣「パレオパラドキシア」の全身骨格

古くから窯業が盛んで、「陶磁器のまち」として、その歴史は室町時代に端緒をなすといわれています。市内には、陶芸を体験できる工房や窯も数多くあり、ギネス認定の美濃焼のオブジェもあります。

また、「ゴルフのまち」としても知られ、市内には、岐阜県下最多13のゴルフ場があります。市内ゴルフ場では、女子プロゴルフツアー大会も開催されます。

中山道の宿場町「大湫宿（おおくてしゅく）」「細久手宿（ほそくてしゅく）」を有するほか、地歌舞伎や人形浄瑠璃も伝承されるなど、「歴史のまち」として、往時のにぎわいを体感することができます。

また、大湫町で大切に育てられた特産品「瑞浪ポーノパーク」は、霜降り割合が一般の約2倍で、肉の旨味成分と脂の甘みが強く、豚肉本来の味を堪能することができます。

2. 活動開始の背景・経緯

大湫町は122世帯、303人が暮らす中山道界隈を舞台として「人」「自然」「歴史」「まち」に親しみを持ち、住民同士の繋がりや文化を大切にしながら、心豊かに生活できる地域を目指している町です。



往時の趣を残す中山道

そのような大湫町の「誇り」であった樹齢約670年、樹高約40mの大杉が倒れたことをきっかけに、未来へと繋がる地域づくりが始まりました。大杉を失った「まち」をどうするのかを考える再生検討会議が週に1度、全22回、毎夜遅くまで、時には真剣なあまり、怒鳴り声も交えて議論されました。会議のメンバーは、30代の若手から70代のシニアまで、町民、行政職員、大学教授、議員、移住者など多様な人材で構成され、大湫の在り方を真剣に考えるうち、次第に世代間や立場といった壁はなくなっていきました。



世代を超えた会議の様

若手は時流に乗ったアイデアとして大杉再生の資金獲得のためクラウドファンディングを実施し、再生方法の提案を町外から求め、プロポーザル方式にて決定していきました。また、大杉の素材活用やイベントについても多くのアイデアを出し、実現していきました。

一方、シニアはこれら全ての活動について、これまでの手法との調和を図りつつ、若手を全面的に信頼することで活動が成り立ちました。

こうして、大杉が倒伏した後でも、大湫を誇りに思い、町民が一体となり、未来へと繋がる地域へと生まれ変わりました。



新たなシンボルとともに
ミライへ繋がる地域へと再生

3. 活動の内容

<創意工夫した組織作りや情報発信>

再生検討会議では、情報収集、判断、提案、意思決定などを早期に行うために、行政や大学、民間事業者等との連携を図る部会、大杉自体の再生方法などを検討する部会など、分野ごとに精通した者を配置することで適材適所を図り、5部会に分かれて実のある議論を重ねていきました。町役員だけでなく、若手や移住者等、これまでにない多様な立場の方を多く入れて編成しました。クラウドファンディングやプロポーザル方式、SNSやホームページ開設などにより、町内にとどまらない多くの方の支援、支持を集めることができました。



住民による公開中継プロポーザル

大杉倒伏の次の日には専用ホームページを立ち上げ、SNS での迅速な情報発信を定期的に行うことや、積極的なプレスリリースを行うことで、大杉に対する想いを集めました。

また、町外の専門家へのヒアリングを行い、プロポーザル審査には大学教授をアドバイザーに迎えました。



地域の若手による話し合い

大杉の再生に際して、多額の活動資金が必要でした。おおよそ大湫町単体では賄えない額の資金について、SNS を駆使し、クラウドファンディングを実施したり、県や市も巻き込み補助金を活用するなど、成功を収めました。大杉の再生完了後も、大湫町において、2つの事業でクラウドファンディングを実施するなど、町外の方にも大湫町の活動を知ってもらい、支援してもらう手法が継続的に取り入れられています。

**287名・6,676,000円のご支援
本当にありがとうございました！**



クラウドファンディングの成功

＜大杉を核とした絆づくり＞

大杉を多くの人に使ってほしいという思いから、大杉の素材活用方法はホームページなどで広く募集し、大杉の素材を活用した、ビール、バイオリン、太鼓などが生まれました。また、それらを用いて、食と音で大杉の歴史を体験するイベント

「大杉音元（おおすぎおとはじめ）」を開催しました。会場には大湫町の人口を超えるおおよそ 1,000 人もの人々が集まりました。

また、県外からも活用についての申込みがあり、大学の研究機関での研究素材、楽器、家具（瑞浪市のふるさと納税返礼品に登録）、和傘、芸術作品の素材として使われました。

これらのことは、改めて大湫町の活動の注目度や関心度が高いことを認識すると共に、住民の大きな誇りになりました。



大杉の素材を活用した楽器を用いたイベント「大杉音元」

地元ビール醸造所と協働し、大杉とビールといった一見すると縁遠いものを組み合わせ、新たなビール開発を行い、「大杉エール」が完成しました。大杉エールは、「670年の昔からこれからの未来にエールを！」をコンセプトとして、一般販売され、地域の方だけでなく、地域外の方へも大湫町の取り組みを知ってもらうきっかけとなりました。



大杉エールの開発

4. 成果

大杉の倒伏によって「シンボル」を失ったかのように見えた大湫町が、逆に、ピンチをキッカケとして世代を超えた話し合いを行い、地域の未来を考え、誇りを感じようと、一つになっていきました。住民主体で考えてきた再生検討会議の手法は、大湫町を誇れるまちにしようとする住民提案型事業の創出の呼び水になるなど、町民すべてが一体となってまちづくりをしていく礎となりました。

住民提案型事業は大湫町のために誰でも提案できる「大湫町をみんなで誇れるまちにする事業」という形で令和4年度から大湫町のまちづくり事業として取り入れられています。

令和4年度は、巨大粘土まちづくり、鱈つかみまくり、五右衛門風呂をみんなで作ろう等、計9つの事業が提案され、町内外、県外の方を含めて1,244人の方が参加されました。



住民提案による事業

大杉が倒伏した時期とほぼ同時期に、大湫町を持続可能なまちとするため、「大湫町ミライ総合振興計画」が、住民主体で策定されました。この計画づくりには、大杉再生を通して得た、若手からの提案による事業手法が採用されました。若手を巻き込んだ計画づくりは地域づくりのモデルとなり、瑞浪市内の他7地区でも同じ手法での「地域計画」の策定が令和5年度から始まっています。



多世代参加による計画づくり

5. 課題と展望

これまで地域づくりに参加してこなかった若手が、再生検討会議でまちの未来について語り合い、活動したことでシニアの信頼を得て、現在でもともに活動することができています。そんな魅力あるまちづくりに共感した方が移住してきたことで、少子化が危ぶまれた令和2年で6人であった小学校児童数は、令和5年には11人と約2倍にまで増加するに至りました。ミライへ繋がるまちづくりに共感いただけるまちの担い手がさらに多くお越しいただけることを目指して活動していきます。